
妖精と人間の話

春の七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精と人間の話

【Nコード】

N0620U

【作者名】

春の七菜

【あらすじ】

昔々あるところに、妖精の女の子と人間が一緒に旅をしていました。これはその一場面。

この人間は変わっている、と思う。

「ロスタニー山脈を超えるのは、今の時期じゃちょっと難しいらしいのよ。なんでもまだ頂上の近くには雪が残っているらしくて。でもここを越えないと二ヶ月かかるって言うし・・・」

さっきから黄ばんだ地図を穴が開くほど眺めてうんうんうなっている人間を横目で見ながら、自分の体ほどもあるカップの縁に口をつけた。熱っ！

ああもう、熱さを確認してから出さないよ！私のチャームポイントの小ぶりで可愛いぷるんとした唇が大きくてタコみたいな色のたらこ唇になっちゃうじゃない！

いーだ！ほっぺを引っ張って遠くにいる店主をにらみつける。

そこで、頭の上からくすくすと笑い声が聞こえた。あら、地図とにらめっこしてたんじゃないの。思わずぶすつと言いそうになっただけれど、地図に嫉妬していたように聞こえるかしら、と思い直して、両手で口を押さえてこらえた。

「ハニィ、人間は自分の感覚で物事を判断するの。それが例えば飲み物なら、自分と同じ人間だから、これくらいがちょうど良い温度だろうってね」

これは私宛に出されたものだし。だから店長を怒らないであげてね。笑いながら私の羽を指でなでる人間。んもう、くすぐったいってば。仕方ないわね、そこまで言うのなら怒らないであげてもいいわ。そう言うと、人間はにっこりと笑った。

ああ、私はこの笑い方に弱い。こうやって笑われると、言い返す気がなくなってしまう。
もう、と眩きながらちよつと羽ばたいて、カップの取っ手に腰を下ろした。

＊ ＊ ＊

私はハニール。アスランダルの森に住む妖精の一人、なんだけれど、今は事情があってこの人間と旅をしている。
事情？聞きたいって？・・・まあ、良いけれど。

あのね、一年くらい前に起こった戦を知っていて？そう、ビルニア国がジェルニー国に攻めてきたんだけれど、その時国境付近にあるアスランダルの森も巻き込まれたの。結局ジェルニー国の王子がビルニア国軍を追い出して戦は終わったんだけれど、ビルニア国軍、せめてもの抵抗とばかりに、逃げる途中でアスランダルの森の一部を荒らしてまわったの。人間って要らないことをするのね。私は呆れかえってしまったのだけれど、妖精の長はそうじゃなかった。怒り心頭よ。我々の森を犯すとは何事か！だって。あまりに怒りが大きすぎて我を忘れて・・・それはそれは大きい竜巻が発生してしまったのよ。・・・もう、何となく分かってきたでしょ？そう、私ったらほら、華奢じゃない？あまりに軽いものだから、竜巻に巻き込まれて飛ばされてしまって・・・。

気がついたら、知らない場所で、この人間に介抱されていた。

それはもう、驚いたわよ！だって、普通、妖精は人間には見えるはずがないんだもの。それなのに、目を覚ましたら人間には見えないはずの私とその人間、ばっちり目が合ったのよ。その上、私の体に

合わせた小さな包帯で怪我した箇所を処置してくれているし。その時のことは今でもはっきりと覚えてる。

「……………」

「あら、起きたのね、大丈夫？」

・・・驚いている様子もなく、優しく話しかけてくる。ねえ私妖精なのよ、気づいてる？ 思わずそう言いたくなっただけで、かすれて声が出なかったから、頷いて大丈夫だと伝えるだけにとどめた。

アスランダルの森がどうなったかは分からない。知りたいけれど、羽はぼろぼろ、落ちた時に叩きつけられたのか体も言うことを聞かなくて、すぐに向かうことができない。このまま人間のところにいるか、痛む体を引きずってでも人間の前から姿を消すか。しばらく悩んだわ。

遙か昔、妖精と人間は一緒に仲良く暮らしていた。妖精は人間たちに自然の恵みや様々な知恵を与え、その代わり人間たちは妖精たちの住む森を大切に守って。だけどそのうち、人間は要請を自分たちよりも格下に見るようになった。さらには、開拓、という名目で妖精の住む森なども妖精に相談せず次々と壊し、妖精たちの住処を奪っていった。もちろん妖精たちは怒ったわ。それまで人間たちに多くのことを与えてきたのに、人間がその関係を裏切ったのだから。妖精たちはそれぞれ自然の力を小さな体の中に秘めているから、感情が昂ぶるとその力があふれ出してしまうの。そう、今回の竜巻みたいだね。だけど、その時は今回なんかと比べものにならないくらい、ものすごい災害が呼び起こされたと言われている。それくらい怒りが大きかった。

その後、妖精は人間の前から姿を消した。はじめの頃は自分たちの意思で姿を消していたらしいのだけど、生態も変化してきたのか人間の前で姿を現すことができない。それとも、人間が妖精を見ることができなくなったのかしら・・・？どちらかはよく分からないのだけれど。

とにかく、そういう理由で、妖精たちは人間を嫌っている。人間に心を許してはいけない、それが当然なこととして過ごしてきた私だから。

人間に介抱されるだなんていう、この状況はあり得ないことだったの。

だから、悩みすぎて、一晩も二晩も寝ることができなかった。そうして出した結論は。

人間なんかに介抱されるなんて屈辱だけれど、この際仕方がないことだと自分をどうにか納得させ、介抱されることにした。私は森に帰らなくちゃいけない。この人間が何を考えているのかは分からないけれど、この体を治さないことには逃げたところですぐに捕まるだけかもしれないし。でも油断は絶対にしない。気だって許さない。大人しく手当てを受けるふりして、少しでも怪しいそぶりが見られたら、妖精の長とまではいかなくともそれなりに力は持っているのだし、ひどい目に見せてやるんだから。そう決めた。

そうして、一週間経ち、一月経ち。私はどこかに売られたり見せ物にもされなかった。なぜか何もされずに無事完治してしまったの。・

・いやあね、何かされたかったわけじゃないわよ。
ただ、一月一緒に過ごしても、この人間のことはよく分からなかった。

分かったことは、ここで一人暮らしをしていて、人間は朝出かけて夜に帰ってくるってことだけ。一度、何をしているのかと聞いたら「いやだ、そんなに私のことが気になるの？」なんて笑顔で言われたから何となく「気になるわけないでしょ」ってそっぽ向いて返してそのまんま。だから、何を職業としているのかも分からない。

それに、どうして私の姿が見えるのか。これも本当、何でか理由がさっぱり分からない。私が姿を見せているのか、この人間が特殊な体質なのか。考えても考えても分からないから、考えることを放棄した。ほら、悶々していると体にも美容にも悪いって言うものね。とまあ、そんな感じであつという間に時が過ぎていった。

とにかく、完治した以上、森の様子を見に行かなきゃ。以前人間に聞いたところによると、ここはアスランダルアスランダルの森からはだいぶ離れているようで、人間の足だと三ヶ月くらいはかかるらしい。私は自分の羽で飛んで移動するのだけど、鳥のように速くは飛べない。人間が歩くスピードと同じか、ちょっと速いくらいなの。とすると、やっぱり三ヶ月くらいはかかるんだわ。・・・私ったら、随分遠くまで飛ばされちゃったのね。

そこまで考えてから、あの人間の顔を思い浮かべる。・・・やっぱり一月お世話になったのだし、人間だけど、お礼はきちんと言わないと。嫌いな種別だからって、妖精はお礼も言わなくて礼儀を知らないなんて広まったら嫌なもの。それに、あの人間は、人間は人間でも・・・ううん、何でもない。

そう、それでね、やっぱりちょっと言い出しにくかったけれど、ちゃーんと言ったわよ。お世話になったお礼と、これから森に帰ること。そうしたら、なんて言ったと思う？

「あら、ちょうど良かった、私も行こうと思ってたのよ。また一緒

にいられるわね」

だって。一緒にいられるわね、なんて笑顔で言われて、・・・ええ、正直に言えばいいんでしょう。ちょっと嬉しかったわよ。一ヶ月ずっと気にかけてもらって、色々なこと教えてもらって、一緒に生活して。信じてても良いかな、・・・うん、信じたいと私が思うようになったの。心を許しちゃいけないってあんなに固く決めたはずなのに。それなのに。

この時にはもう、人間の笑顔にこんなに弱かったんだわ。

・・・あら、長くなっちゃった？回想はこれくらいにしましょうか。そう、こうして二人でアスランダル森へと出発したのです。

* * *

「決めた！」

「きゃあっ、——もう、急に立ち上がらないでよ！」

人間が立ち上がった振動で机が揺れて、机の上のカップに乗っていた私は思わずカップの取っ手にしがみつく。スープもカップの中でぶっかぶっかと揺れて、頭やワンピースにかかりそうになった。

スープかぶって全身やけどするかと思ったわ。もう、危ないったら！

「ああ、ハニィ！大丈夫！？」

「・・・どうにかね。スープはかからなかったから、許してあげる」

「良かった、ありがとう」

ほっと息を吐きながら私の髪をなでる指。ああ、気持ちが良い。眠くなっちゃいそう……。と思つて、はたと気がつく。だっ、だめだめ！この人間をほうっておいたら、旅がまた止まっちゃう！この前も、ついつい眠気に負けて……。気がついたら太陽が真上に昇つてゐるのに人間ったらまだ寝ていて！起こすのにはそりゃあもう苦労したわ。何考えてゐるのと問い詰めると『だってハニィを起こすの忍びなくて』ですって。私のせいにするなー！私なんてこんなに小さいんだから、懷にでも入れて歩けば何も問題ないでしょうが！そして結局、その日はほとんど進めなかった。この前だけじゃない、その前だって、その前の前だってそうだった。言い訳も同じ！旅が進まないったらありやしない。そうよ、一緒に生活し始めて分かったこと、もう一つあったんだったわ。この人間、しっかりしてるように抜けていたりとぼけているところがあるのよ。だからここは、私がしっかりしなきゃ！

「それで？何をどう決めたの？」

眠気はどこかへ行つて！眠りへの甘い誘惑をどうにか頭を振って吹き飛ばそうとする。瞼が閉じそうだけど、目をこすり、頬もつねって刺激を与えて耐える。今日こそは、私が寝ていたっていう言い訳はさせないんだから！

「あら、今日は寝ないのね。ハニィの寝顔好きなのに」

「……ごまかさないで！」

顔が赤くなりそう。もう、なんてことを言うのよ。ぷりぷりしてみせると、ごまかしてなんかないわよーと人間もぷくっとな頬を膨らませた。それでもきれいな人間の顔。人間のくせに！

妖精はきれいなものに弱いだよ。この人間、普段もきれいな顔をし

ているけれど、笑うともっともっと素敵になるの。そうだわ、だからきつと私、この人間の笑顔に弱いよね。

「んもう、つれないわね。そう、決めたのよ！」

「だから、何を」

「聞きたい？」

「早く聞かせなさいよ！」

もったいぶらないでよ！どうするの、山を越えるの越えないの？

「あのね」

ああまた、私の好きな笑顔で——何を言うのかと思いきや。

「決められないから、今日はもう休むことにしようかなって」

がつくり。ああ、寝ないぞっていう私の努力はどこへ？寝ようが寝てなかりうが結局同じじゃないの。私の羽がぱたりと下向いた。

出発してから五ヶ月、予定していた三ヶ月はどうに過ぎましたが、まだまだ旅は続きそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0620u/>

妖精と人間の話

2011年10月9日07時37分発行